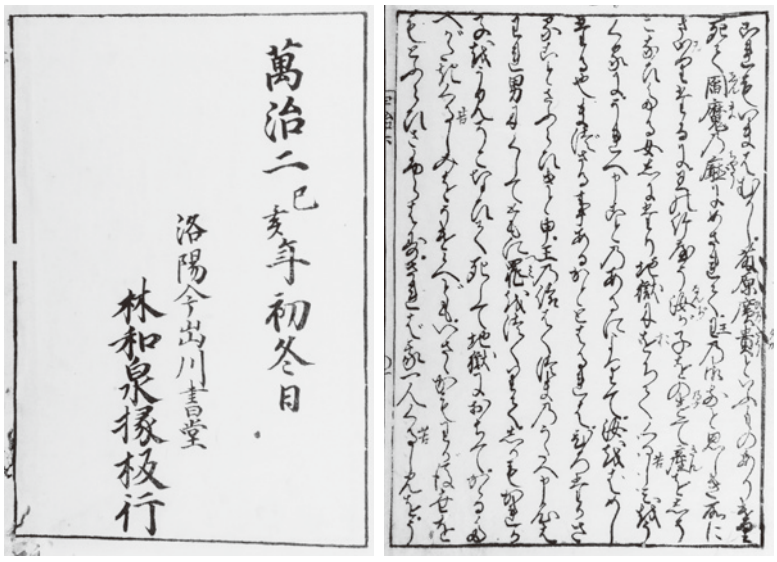
［28］『宇治拾遺物語』（小林－140）

版半10巻合２冊（22.4×15.7）。全15巻のうち巻１～５欠。原題簽（巻６・10存、中央無辺）外題・内題「宇治拾遺物語」。柱題「宇治」。後表紙見返に刊記「万治二己亥年初冬日／〈洛陽今出川書堂〉林和泉掾板行」。四周単辺11行。漢字かな交じり。挿画入り。原装薄（はなだ）縹色表紙。印記「歌城」「布治波良乃毛等袁宇多岐尓乎佐牟留布美良乃之留思」「伊藤文庫」「月明荘」。江戸の旗本で国学者、小林歌城（おばやしうたぎ）（藤原元雄、文久２年没85歳）による校異・補注書入あり、巻末に識語「文化七年正月校正　藤原元雄／同年同月十二日再校／文政九再校／天保四年三月九日石川子の本もて校了　歌城居士」。＊1659

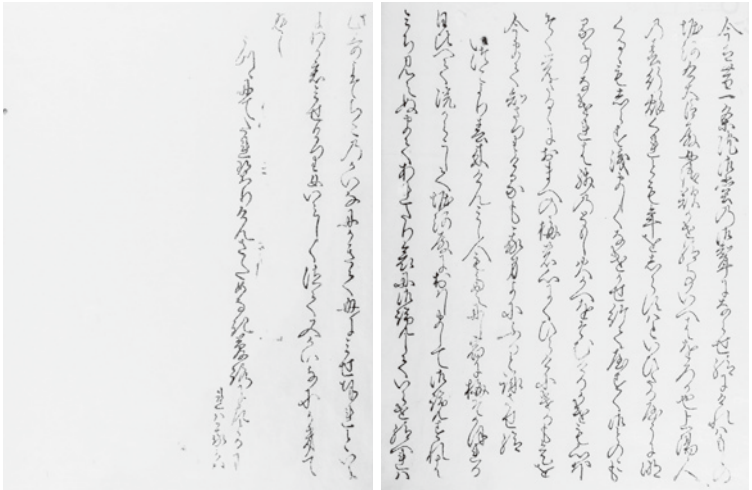


『世継物語（よつぎものがたり）』

編者未詳。平安末期より鎌倉中期にかけての成立。和歌説話を主に構成された説話集で、和泉式部・紫式部・清少納言などの王朝人が本書に彩りを添えている。『古本説話集』と共通する話が多数あり、その関係性が注目される。伝本は①版本『世継物語』と同類の本文を有する系統、②流布本系『宇治拾遺物語』の第５冊として伝来した系統、③版本『宇治大納言物語』の系統、に大別される。

［29］『世継物語』（小林－60）

版大１冊（27.2×19.3）。原題簽（中央無辺）外題「世継物語」。無刊記。10行。漢字かな交じり。原装縹（はなだ）色表紙。小林氏による付箋多数。＊近世前期刊

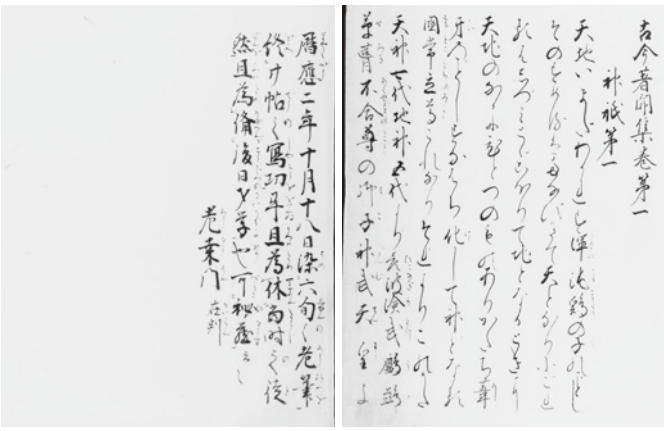


『古今著聞集（ここんちょもんじゅう）』

橘成季（たちばなのなりすえ）編。自序によれば建長６（1254）年10月の成立。『今昔物語集』に次ぐ分量の約700話を収めるが、現存本ではその中の数十話が後人による増補と分かっている。『古今和歌集』の形式に倣い、文化・世相・自然といった多岐にわたる事項を30項目に分け、百科全書的に説話を部類・配列している。編纂は主に尚古思想に基づいているが、話題の豊富さからは俗化した当世風を受け入れる多彩な関心領域をうかがうことができる。出典を尊重し、脚色に対して抑制的な方法をとろうとした態度の表れからか、王朝貴族の日記・記録の類からの抄出が基本となっている。諸本は九条家旧蔵本・宮内庁書陵部蔵一本以下の甲門と三手文庫蔵本・吉田幸一蔵本以下の乙門に大別できる。

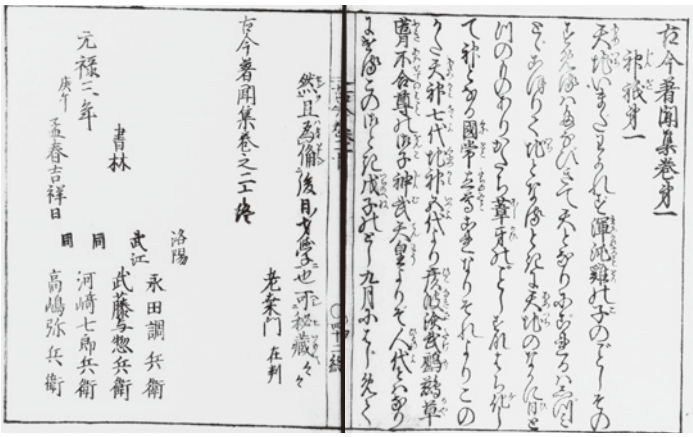
［30］『古今著聞集』（小林－128）

写大20巻10冊（27.0×19.3）。原題簽（左肩無辺）・序題・内題「古今著聞集」。建長６年自序。建長６年・暦応２年元奥書。10行。漢字かな交じり（ふりがな入り）。原装水浅葱（あさぎ）色表紙。印記「斑山文庫」。本文は甲門。＊近世中期写



［31］『古今著聞集』（小林－130）

版半20巻20冊（22.0×15.6）。原題簽（左肩双辺）・内題「古今著聞集」。建長６年・暦応２年奥書。刊記「元禄三年庚午孟春吉祥日／書林〈洛陽〉永田調兵衛／〈武江〉武藤与惣兵衛／〈同〉河崎七郎兵衛／〈同〉高嶋弥兵衛」。やや後印。四周単辺10行。漢字かな交じり。絵入り（絵は又丁で入る）。原装白地表紙、小菊・梅花・唐花・松葉・小桜（藍刷）。本文は甲門で誤脱が多い。＊1690

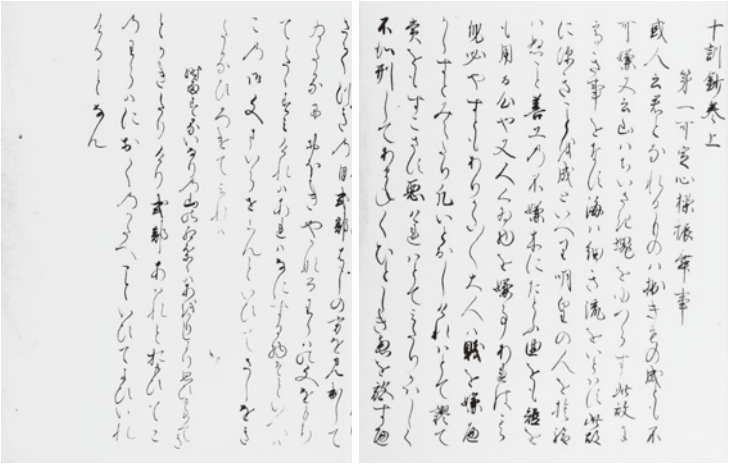


『十訓抄（じっきんしょう）』

編者未詳。序文によれば建長４（1252）年10月中旬の成立。教訓的な啓蒙意識が発想の基本にあり、具体的・実際的な処世の導きとなることを志向している。教訓を10項目に分け、それぞれの徳目にふさわしい説話を類聚的に収めている。『史記』『漢書』などから引かれた中国故事が多く収められており、国書からも「六国史」『万葉集』『大和物語』『江談抄』『宇治拾遺物語』などの文献から多数引用している。これは抜書的な抄出に止まらず、主題に沿うように内容の切り替え、要約がなされており、表現も啓蒙意識によって解説的に和らげられ、簡約にまとめれているところが少なくない。伝本は第１類３巻有欠本、第２類片仮名３巻本、第３類補欠諸本、第４類流布版本の４種に大別される。

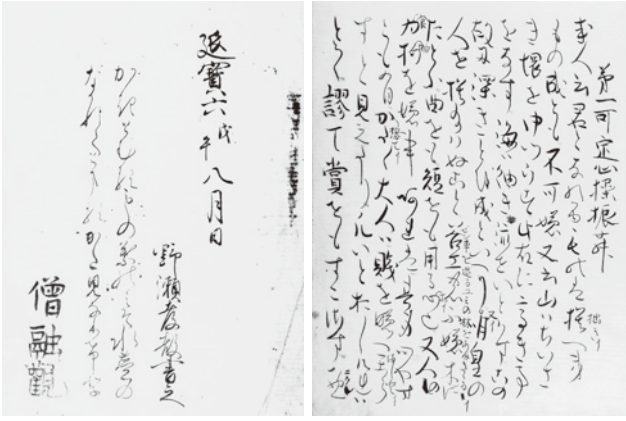
［32］『十訓抄』（小林－152）

写大10巻３冊（27.3×19.1）。原題簽（中下冊存、左肩無辺、黄色料紙）外題・序題・内題「十訓鈔」。建長４年序。12行。漢字かな交じり。原装白地表紙、布目（型押）。料紙斐楮交漉（ひちょまぜすき）。印記「西駿中根家本氏記」「正孫之章」「内山」。本文は第１類。＊近世中期写



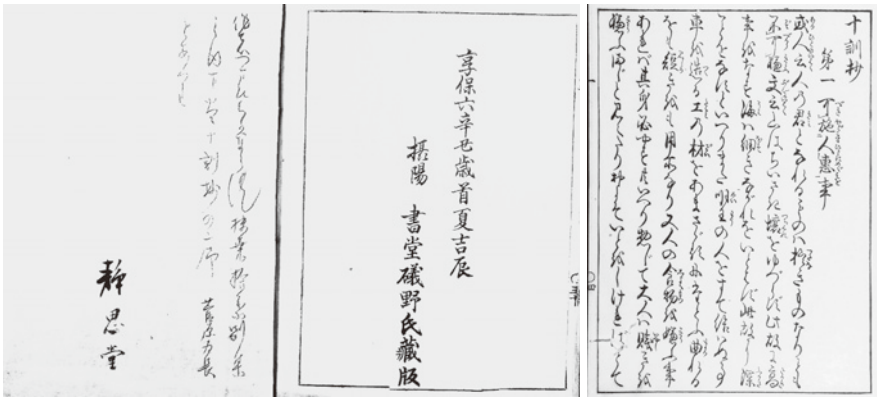
［33］『十訓抄』（小林－153）

写大３巻２冊（27.3×19.1）。書外題・序題・内題「十訓鈔」。建長４年序。元書写校合識語「曽聞菅為長卿作十訓抄是歳之春浴菅豊長朝臣之恩渥携来使満直疾謄手自滴朱露点検了想天藝圃花馥詞林月明題分十条訓渉衆黎比釈家之十第耶擬儒門之十哲耶可謂万世之模範也書以為跋／寛文十稔龍輯庚戌立春日　如松子」（福住道祐）。書写識語「延宝六戊午八月日／野瀬孝教書之／かきとむることの葉のみそ水茎のなかれてとまるかたみなりけり」。12行。漢字かな交じり。原装白地表紙、布目（型押）。料紙斐楮（ひちょまぜすき）交漉。印記「西駿中根家本氏記」「正孫之章」「内山」。識語「僧融観」。朱点・校合書入あり。本文は第１類。＊1678



［34］『十訓抄』（小林－154）

版半10巻12冊（22.6×15.8）。原題簽（左肩双辺）外題・序題・内題「十訓抄」。建長４年序。最終丁裏中央に刊記「享保六辛丑歳首夏吉辰／摂陽書堂礒野氏蔵版」（刊記入木）。早印。四周単辺10行。漢字かな交じり。挿画入り。原装砥粉（とのこ）色表紙。識語「作者つまひらかならす扶桑拾葉別集之内下巻十訓抄の序菅原為長とあり／静思堂」。本文は第４類。＊1721

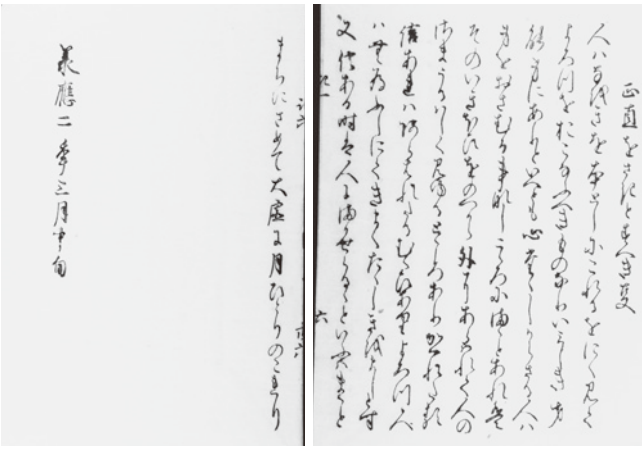


『寝覚記（ねざめのき）』

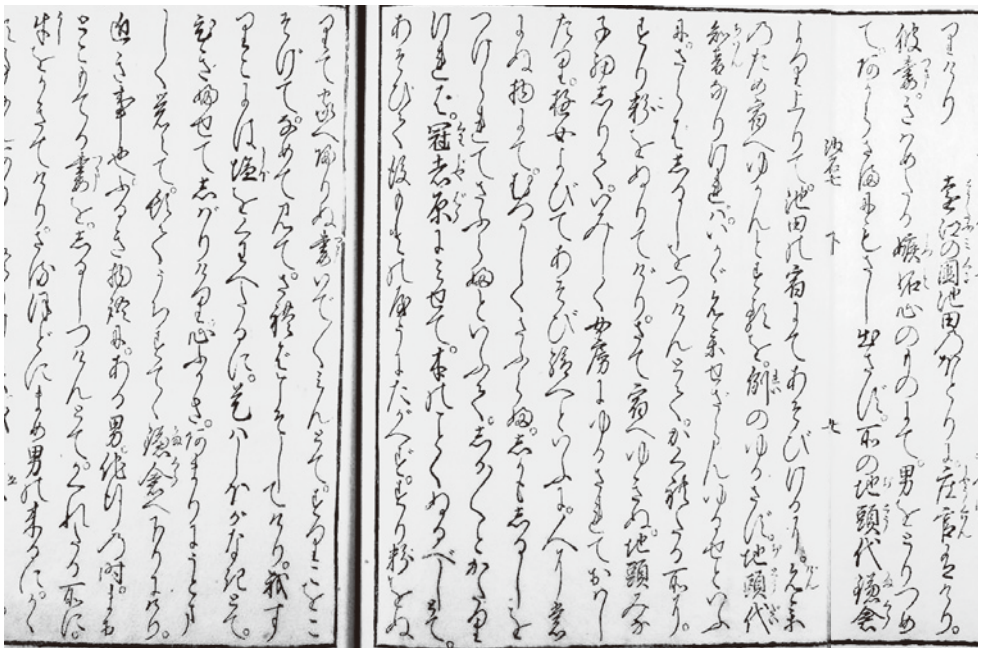
編者未詳。『沙石集』からの引用があるので、弘安６（1283）年以後、鎌倉時代末期頃の成立か。教訓説話集で『十訓抄』を出典とするものが41話あり、編目を10に分けることからも、その影響の大きさがうかがわれる。しかし、当時の世相を反映した独自の説話も含んでいる。序文では、草庵に住む遁世者によって書かれた旨が示されるが、『方丈記』との表現の類似も指摘される。教訓を主としながらも隠者文学的な側面をも有している。

［35］『寝覚記』（小林－３）

版大不分巻６冊（26.1×17.2）。原題簽（左肩双辺）「ねさめの記」。内題なし。柱題「記」。自序あり。最終丁裏本文末左に刊記「承応二年三月中旬」（版元名削除か）。やや後印。10行。漢字かな交じり。原装墨色表紙。＊1653



説話（はなし）の書物を読む（3）　中世の女と男



図版は『沙石集』［40］巻７で、敢えて平仮名本を用いました。これまた尾籠と猥雑を極めた話で恐縮ですが、このような奥の深い「大人の話題」を含んでいることも、同時代の他ジャンルの書物にはまず期待できない、説話集の魅力なのです。この話は流布版本にちゃんと入っていて、『沙石集』がよく読まれた江戸時代には多くの人たちが知っていたはずです。一見仏書のような装いを見せる版本『沙石集』にこんな話が収められているとは驚きですね。かえって、流布本を底本とする岩波文庫本は戦時中の昭和18年刊ですから、掲出の話は伏せ字だらけで正確に読むことができません。

文中の「すり粉（こ）」は屑米を擂って細かい粉にしたもので、重湯（おもゆ）や団子の材料にしました。『沙石集』は説法のために編まれた書ですから、男性に比べて女性の愛執の強さ、罪深さがいちおう強調されていますが、話そのものの面白さに編者の主な興味があることは疑いありません。この話の次には、同じような話ながら男と女の立場が逆の場合にどうなったかという珍談、さらにその次には山中で出会った山伏と巫女とが契る、スコブル付きの興味深い小話があるのですが、残念ながら省略しましょう。

これらの話からは当時の女性のたくましい姿が浮かび上がってきます。それから腹の底から笑う哄笑の世界も中世に独特のものではないでしょうか。近世に入ると笑いの質がもっと隠微なものとなり、その後の日本において、哄笑は大人の文学の世界から姿を消すこととなるのです。

Ⅲ　尾張国長母寺と無住

無住道暁は嘉禄２（1226）年に武将の梶原氏の子として鎌倉に生まれますが、まもなく父母と別れ、孤独不遇な少年時代を過ごしました。18歳で出家、律学を中心に、禅や真言など諸宗を博く学びました。37歳の弘長２（1262）年に、名古屋大学ともほど近い長母寺の住持となり、没するまでの約50年間をここで過ごします。その間『沙石集』『聖財集』『雑談集』などの書物を残し、それらははるか後世まで広く愛読されました。

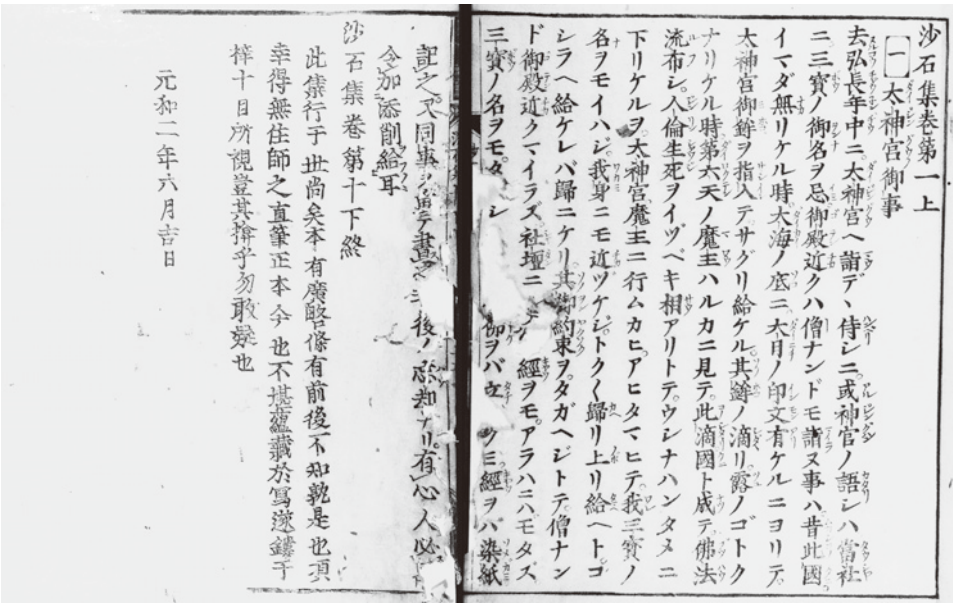
無住は青少年時代に苦労を重ねてきた人で、中央寺院のみならず、さまざまな地方での生活を経験しました。そのせいか、宗教人としても柔軟で、俗的世界をも抱え込む懐の深い人物でした。無住の著作には同時代の人々のいとなみに対する愛情ある視線があり、独特の味わいとなっています。

『沙石集』

無住道暁著。弘安２（1279）年に起筆、同６年に完成。教理や信仰にかかわる談義より卑俗な説話までを、縦横に引きながら叙述された仏教説話集。無住は教理のみにとらわれず、庶民の生きる姿に視線を向けている。尾張や関東など地方にまつわる話題も多い。僧侶の説教の素材として、落語につながる笑話の素材として、広く享受された。成立後も添削、説話の加除、裏書きなどが繰り返されて、多様な伝本を残す。俊海本・米沢本など10巻12帖本系、梵舜本など10巻10帖本系、流布本系、に大別される。

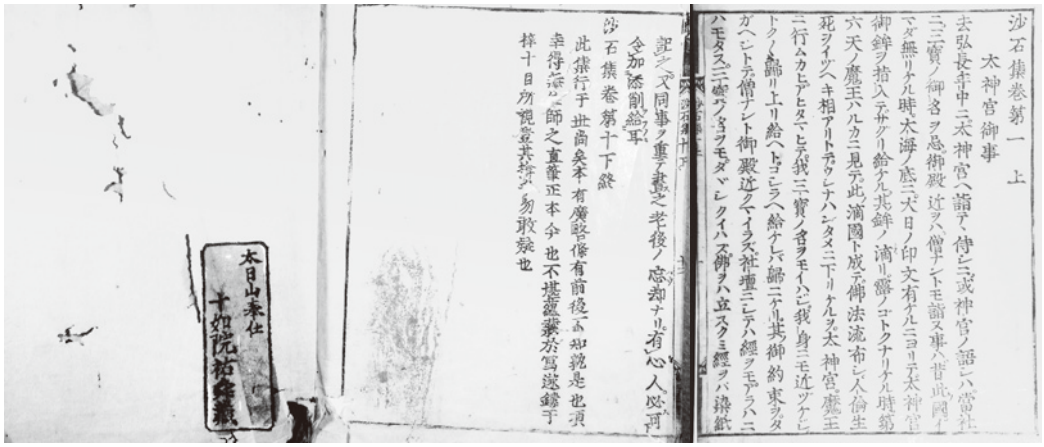
［36］『沙石集』（小林－84）

版大10巻９冊（27.2×19.2）。巻１～９と巻10の取合せ本（巻９・10を合綴する）。巻１～９：貞享３年版（→［39］）の同版早印本。原題簽（一部破損あり、左肩双辺）・内題「沙石集」。原装白茶色表紙。巻10：元和古活字版の覆刻整版本。四周単辺12行。漢字カナ交じり。末尾に刊語「此集行于世尚矣本有広略条有前後不知孰是也須幸得無住師之直筆正本今也不堪蘊蔵於写遂鏤于梓十目所視豈其揜乎勿敢疑也／元和二年六月吉日」。＊1686／近世初期刊


沙石集巻第一上
一　太神宮御事
去弘長年中ニ太神宮ヘ詣デ、侍シニ或神官ノ語シハ當社
ニ三寶ノ御名ヲ忌御殿近クハ僧ナンドモ詣ヌ事ハ昔此國
イマダ無リケル時大海ノ底ニ太日ノ印文有ケルニヨリテ
太神宮御鋒ヲ指入テサグリ給ケル其鋒ノ滴リ露ノゴトク
ナリケル時第六天ノ魔主ハルカニ見テ此滴國ト成テ佛法
流布シ人倫生死ヲイヅベキ相アリトテウレナハンタメニ
下リケルヲ太神宮魔主ニ行ムカヒアヒタマヒテ我三寶ノ
名ヲモイハジ我身ニモ近ヅケジトク〻歸リ上リ給ヘトゴ
シラヘ給ケレバ歸ニケリ其御約束ヲタガヘジトテ僧ナン
ド御殿近クマイラズ社壇ニ　經ヲモアラハニハモタズ
三寶ノ名ヲモタ〻シ　御ヲバ　ウミ經ヲハ染紙
記之尺同事ヲ書ベシ後ノ忘知ナリ有心人必
令加添削給耳
沙石集巻第十下終
此集行于世尚矣本有廣略條有前後不知孰是也須
幸得無住師之直筆正本今也不堪蘊藏於寫遂鏤于
梓十目所視豈其揜乎勿敢疑也
元和二年六月吉日

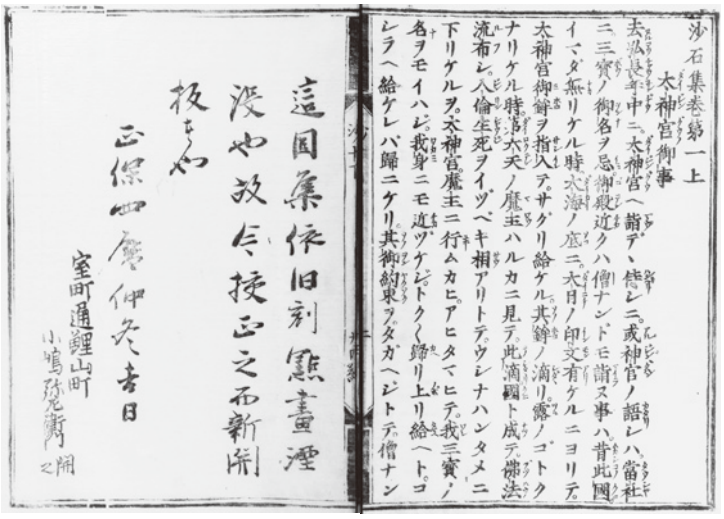
［37］『沙石集』（小林－90）

版大９巻９冊(28.7×20.7)。全10巻のうち巻２欠。原題簽(巻３～５・８存、左肩双辺)外題・内題「沙石集」。元和古活字版の覆刻整版本（→［36］）と同版、刊語末尾の「元和二年六月吉日」を削除する。四周単辺12行。漢字カナ交じり。原装褐色表紙。印記「太日山奉仕／十如院祐舜蔵」「濃州象背山南宮利生院蔵」「三浦」。＊近世初期刊



［38］『沙石集』（小林－86）

版大10巻10冊（26.5×17.4）。原題簽（左肩双辺）外題・内題「沙石集」。最終丁裏に刊記「這固集依旧刻点画湮没也故今校正之而新開板者也／正保四暦仲冬吉日／〈室町通鯉山町〉小嶋弥左衛門開之」。後印。四周双辺11行。漢字カナ交じり。原装褐色表紙。見返に識語「霊鷲山長母寺什物／現住亨山代／奉寄附沙石集十巻／施主〈尾州名古屋石町〉俗名増元源右衛門／法名俊嶺源良居士／為菩提」、信徒によって長母寺に寄付された本。＊1647

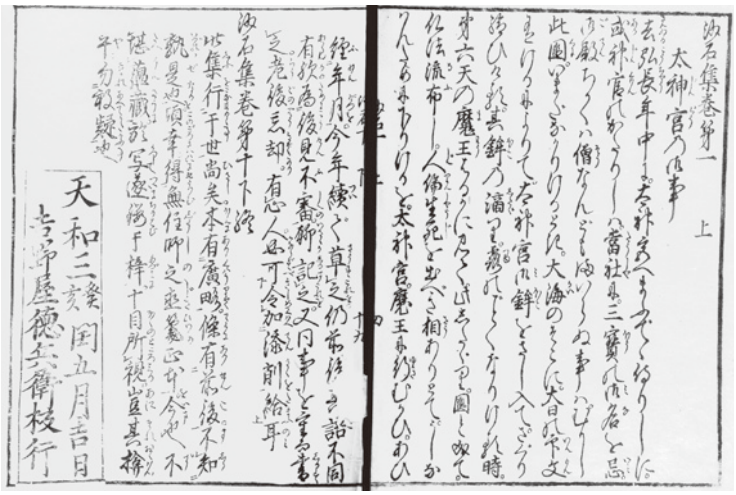


［39］『沙石集』（小林－87）

版大10巻10冊（26.2×19.1）。原題簽（巻３～７・９存、左肩双辺、一部破損）外題・内題「沙石集」。後表紙見返に刊記「這固集依旧刻点画湮没也故今校正之而新開板者也／貞享三丙寅年閏三月上旬／〈白山通三条上町〉小嶋弥三右衛門版行」。やや後印。四周単辺13行。漢字カナ交じり。原装縹色表紙。＊1686

［40］『沙石集』（小林－85）

版大10巻10冊（26.6×18.2）。原題簽（左肩双辺）外題・内題「沙石集」。最終丁裏左下単辺枠内に刊記「天和三癸亥閏五月吉日／吉野屋徳兵衛板行」（刊記入木）。やや後印。四周単辺11行。漢字かな交じり。原装縹（はなだ）色表紙。慶安版（刊記「慶安五壬辰初夏吉旦／中野氏是誰新刊行」）の求板後印本。＊1683

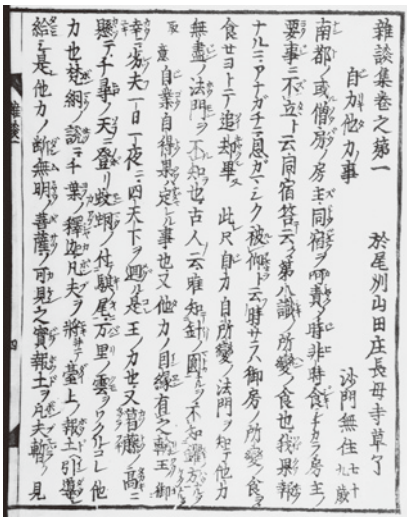


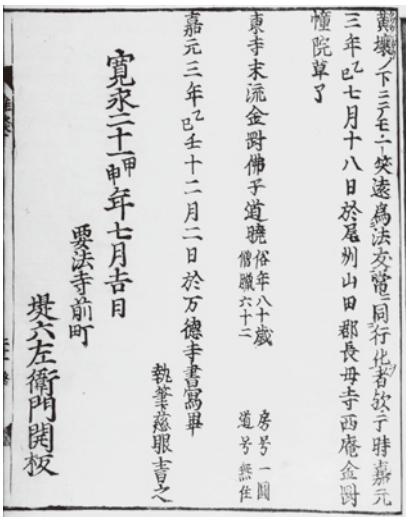
『雑談集（ぞうたんしゅう）』

無住道暁著。嘉元３（1305）年７月に成立。その後、補訂が行われたか。教説や理論を、多くの説話を利用しながら叙述する。「雑談」という、真の教説からは猥雑と見なされかねない形式を、敢えて自らの表現手段としたところに、独特の姿勢がうかがわれる。巻３の「愚老述懐」は、無住の伝記や境涯を知る上で重要な記述を含む。巻４の末には38首の和歌を収める。現在知られている伝本は版本のみで、寛永21年版・延宝７年版・刊年不明版があるが、すべて同版。

［41］『雑談集』（小林－92）

版大10巻５冊(28.0×19.3)。原題簽（左肩双辺）外題・内題「雑談集」。巻首に「於尾州山田庄長母寺草了／沙門無住〈七十九歳〉」。嘉元３年奥。本文末に刊記「寛永二十一甲申年七月吉日／〈要法寺前町〉堤六左衛門開板」。早印。四周単辺12行。漢字カナ交じり。原装丁子色表紙。印記「桂氏蔵書」「存禎」「烏江文庫」。識語「主次久（花押）」。＊1644



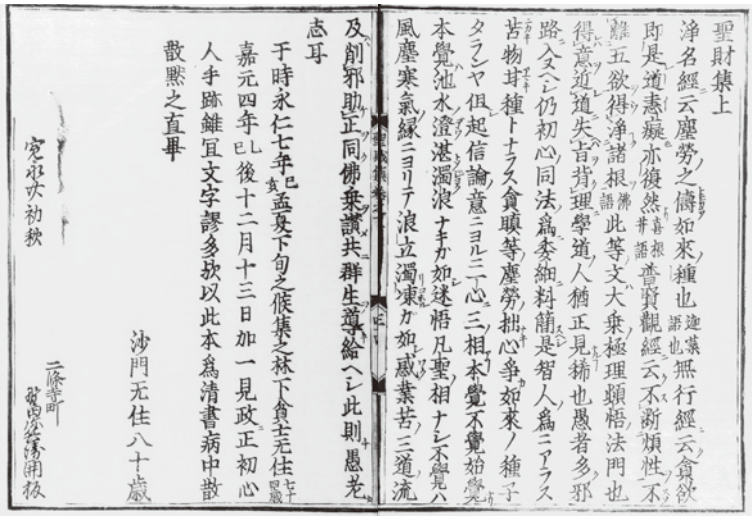


『聖財集』（しょうざいしゅう）

無住道暁著。永仁７（1299）年成立。教理・戒律などを主に仏典や経疏の引用によりながら、ときに説話を交えて示す。書名の由来となった七聖財とは、信・戒・慚・愧・多聞・智恵・捨離のことで、その中でも無住が重視するのは智恵であり、般若の思想である。一切を捨て「空」に近づくことが悟りへの道であることを説く。本論部は10の章段より成り、「今世後世四句」のように四句分別の方法で、重んずべきものが何であるかを説く。伝本は清書本系と添削本系に大別される。

［42］『聖財集』（小林－21）

版大３巻３冊（28.1×18.1）。原題簽（左肩双辺）外題・内題「聖財集」。嘉元４年奥。最終丁裏最終行に刊記「寛永廿初秋〈二条寺町〉野田弥兵衛開板」。初印。四周双辺10行。漢文体・漢字カナ交じり。原装栗皮色表紙。本文は清書本系。＊1643


聖財集上
浄名經云塵勞之儔如來種也迦葉無行經云貪欲
尚是道恚癡亦復然普賢觀經云不斷煩惚不
離五欲得淨諸根佛語此等文大乘極理頻悟法門也
得意道失旨背理學道人猶正見稀也愚者多邪
路入文仍初心同法爲奏細料簡是智人爲ニアラス
苦物甘種トナラス貪瞋等塵勞拙心爭如來ノ種子
タランヤ但起信論意ニヨル三心三相本覺不覺始覺
本覺池水澄湛浪ナキカ如迷悟凡聖相ナレ不覺見ハ
風塵寒氣緣ニヨリテ浪立濁凍カ如感業苦三道流
及削邪助正同佛乘讃共群生尊給ヘレ此則愚老
志耳
于時永仁七年己亥孟夏下旬之候集之林下貧士无住
嘉元四年己巳後十二月十三日加一見政正初心
人手跡雖宜文字謬多欤以此本爲清書病中散
散黙之直畢
沙門无住八十歳
寛永廿初秋
二條寺町
野田弥兵衛開板

『妻鏡』（つまかがみ）

仮名法語。無住の著作とされるが、それを疑う説もある。『無住国師道跡考』には、正安２（1300）年成立とあるが根拠は不明。無常を自覚すべきこと、女性の罪重きこと、口称念仏が決定往生の業であることなどを、説話を引きながら述べる。中には、月照上人と馬の話のように珍しい説話も収められている。書名の『妻鏡』は、女性が常に身辺に置いて参照すべき書物の意か。

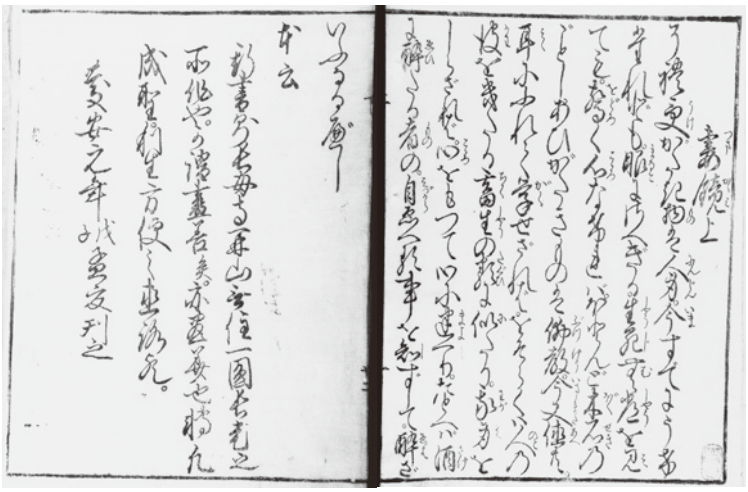
［43］『妻鏡』（小林－31）

版大１冊（28.0×17.5）。書外題・内題「妻鏡」。奥書「本云／斯書則長母寺開山無住一円長老之所作也可謂尽善矣亦尽美也転凡成聖利生方便之直路歟」。最終丁裏双辺枠内に刊記「寛永十八年辛巳／春三月吉日刊行」。早印。四周双辺10行。漢字カナ交じり（総フリガナ付）。原装栗皮色表紙。＊1641

妻鏡
夫難受者人身今既受之共眼二十年ニ生死無常ノ見
テモ後世心無ケハ殆木石ノ如ニ難値者佛教今亦値共耳ニ
醫ニ學セサレハ恐ク人ノ皮ヲ着タ畜生類ニ似タ我身ヲ不知心
ヲ以テ心ニ迷ヒ学ヒ酒ニ酔タ者自ラ酔ヘハ事ヲ不知ト不酔人ヲ
問テ長夜ニ眠者夢ノ中ニ夢ヲ不知ヲ子ヲトヲ不ニ以タ養母
テ父ニ北ニ露ト消ヘ勢リ来テ空ニ東ノ煙ト登レ此ノ身ノ
為ニ生ル物人命ヲ断テ口ニ味ヒ根ヒ財寶ヲ貪テ衣食ノ計ト
ス夫財寶ハ甘毒ニ似タリ彼ニ酔テ佛道ヲ不修行ス現世ノ甘
露ハ後生ノ鐵丸ト成ト云ヘリ愚哉一旦ノ假ノ名ヲ養ハンカ為ニ
寛永十八年辛巳
春三月吉日刊行

［44］『妻鏡』（小林－30）

版大２巻１冊（26.7×17.6）。原題簽（左肩双辺）外題「つまかゝみ　上下」。内題「妻鏡」。奥書・刊記「本云／斯書則長母寺開山無住一円長老之所作也可謂尽善矣亦尽美也転凡成聖利生方便之直路歟／慶安元年戊子孟夏刊之」。早印。四周単辺９行。漢字かな交じり（総ふりがな付）。原装縹（はなだ）色表紙。印記「糟谷」「春日氏印」。＊1648

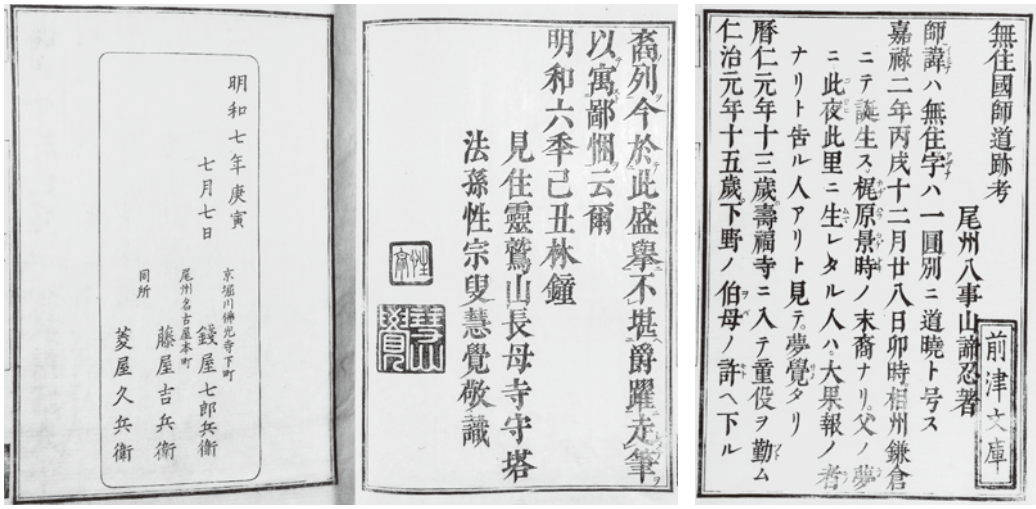


『無住国師道跡考』（むじゅうこくしどうしゃくこう）

近世の無住伝の白眉とされる伝記書。浄土真宗の学僧で禅僧とも交流のあった、尾張八事山興正寺の諦忍（たいにん）が、従来無住の行状記のないことを遺憾とし、長母寺現住の性宗と相談し、遺著や旧記、口碑を博捜して編んだもの。巻頭に「大円国師道影」（無住画像）と「長母寺之図」あり。

［45］『無住国師道跡考』（小林－32）

版大１冊（27.3×18.3）。原題簽（左肩双辺、柿色料紙）外題「〈尾張州／木賀崎〉無住国師道跡考」。明和６年夏安居、尾州興正空華叟（刻印「釈諦忍印」「空華堂」）自序。明和６年仲夏、華園賜紫見住尾府総見寺祥鳳禅瑞（刻印「景陽山主」「禅瑞」「祥鳳之章」）序。巻首「尾州八事諦忍著」。明和６年林鐘、見住霊鷲山長母寺守塔法孫性宗叟慧覚（刻印「性宗」「慧覚」）跋。後表紙見返に刊記「明和七年庚寅／七月七日／〈京堀川仏光寺下町〉銭屋七郎兵衛／〈尾州名古屋本町〉藤屋吉兵衛／〈同所〉菱屋久兵衛」。漢字カナ交じり。原装濃縹（はなだ）色表紙、雷文（らいもん）繋地に桐花唐草文（型押）。印記「両日屋図書」「前津文庫」。＊1770



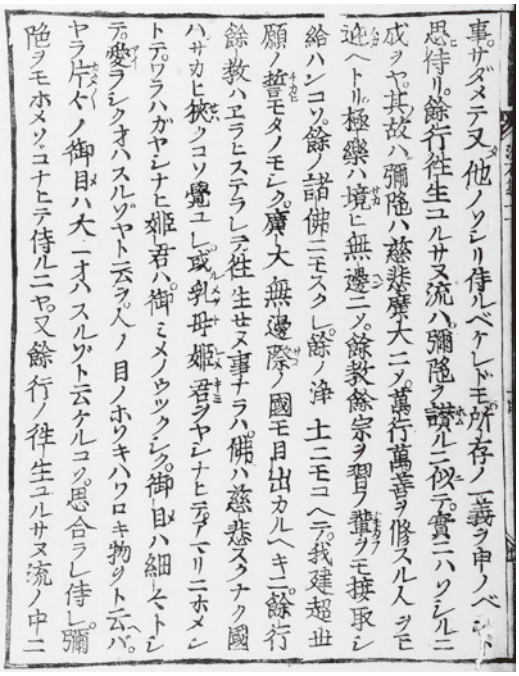
無住木像

　霊鷲山長母寺は、臨済宗東福寺派、本尊は阿弥陀如来。治承３(1179) 年に尾張守護職の山田次郎重忠が木賀崎の地に建立した。弘長２(1262) 年、山田道円夫婦が再興、無住が迎えられて開山となる。本堂左手の開山堂に安置されている無住国師木像（国指定重要文化財）は写実を極めたもので、無住和尚の豊かな人間性を活写している。なお、長母寺には貞享３年版『沙石集』全10巻の版木も什物として保管されている。
＊長母寺（名古屋市東区矢田町字寺畑）へは、名古屋市営地下鉄名城線「名古屋ドーム前 矢田」駅（「名古屋大学」駅より５つ目）下車、北へ徒歩約15分。

山門

本堂と開山堂

説話の書物を読む（4）　近世の無住思慕者、山雲子



近世前期の元禄頃に啓蒙的著述を続々と述作刊行した山雲子、俗称坂内直頼という人がいます。畢生の大著、山城の地誌書『山州名跡志』の自序で、自ら「西山無住老禅之旧廬」に住むことを明記するなど、無住への思慕の情が強かった人です。山雲子は若い頃に噺本の著述があり、その一つ『軽口大わらひ』という本に「麁相者媒の事」という笑話があります。ある人が他家の息子に嫁をめあわせようとして、その女を褒めるのですが、「口もとのしほらしさ、目もとなどはほそぼそとして薄のやうにござる」と言ってしまいます。それを聞いた息子が「女の目には鈴を張れと言ふに、細過ぎていやじや」と言うと、男ははっと思って「いやいや細いはかたかたの目の事、一方は大きにござる」と言います。掲出の『沙石集』（[37]）巻１の話を利用したものと思われます（末尾から５行目以下）。

そのほか、山雲子の噺本『けらわらひ』の「だんぎの座にて女取はづしの事」という話も、『沙石集』「説経師下風讃タル事」に基づいていることが明らかです。注目すべきは、この話は現在知られる伝本の中では梵舜本（古典大系所収）にしかなく、流布本はじめ他の諸本には見えないことです。山雲子の『沙石集』享受が、流布本のみならず諸本の博捜にまで手を伸ばしていたことがうかがえます。

なお［49］『浄土勧化三国往生伝』は、従来著者不明でしたが、山雲子の編著であることが近年判明しました。ここにも無住的精神が、遠く時代を隔てた山雲子に与えた影響を見ることができるでしょう。

Ⅳ　説話の継承と展開

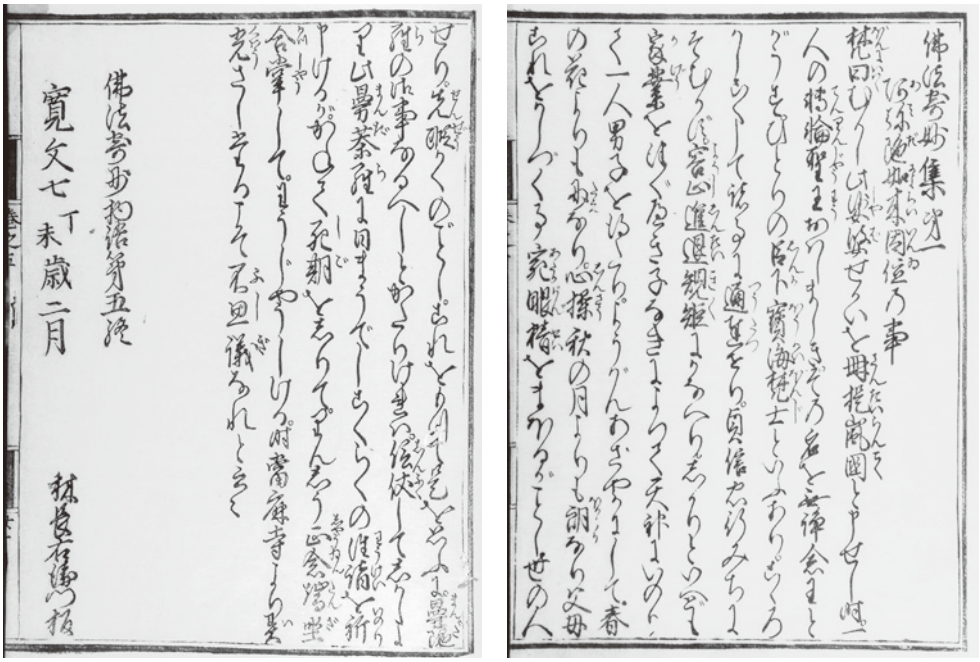
説話集は後世にも受け継がれます。江戸時代に入り出版が本格化すると、数々の説話集が古活字版・整版で繰り返し刊行されました。読み物として人気の高かったことを物語っています。また、新たな内容を盛り込んだ近世的な説話集も続々と刊行されます。

『仏法奇妙集』

版本系かと思われる『三国伝記』全12巻360話より65話を抜き出し、和漢混淆文を漢字かな交じりに読み下したもの。65話の内訳は、梵22・漢18・和25である。『三国伝記』の中世末より近世にかけての受容や訓法を知る資料。本書は、元禄９（1696）年に、同じ版木を用い桑門虚舟子の序を新たに加えて「新選沙石集」として改題刊行され流布するが、初版本は比較的稀れ。

［46］『仏法奇妙集』（小林－８）

版大５巻５冊（26.1×17.9）。書題簽・目録題・内題「仏法奇妙集」。尾題「仏法奇妙物語」（巻２～４は「奇妙物語」）。目録題・内題の「集」は入木で、もと「仏法奇妙物語」を発刊直前に改めたものか。巻５尾題の左に刊記「寛文七丁未歳二月　林長右衛門板」。早印。四周双辺11行。漢字かな交じり。改装浅葱色表紙。同版改題本「新選沙石集」あり、元禄８年蜡月上浣、桑門虚舟子序を新たに付し、刊記を「元禄九丙子稔正月吉日　洛陽〈大船屋〉志水長兵衛／江戸〈前田屋〉八尾徳兵衛」に改刻（無刊年、皇都書林藤屋武兵衛刊の求板後印本あり）。＊1667

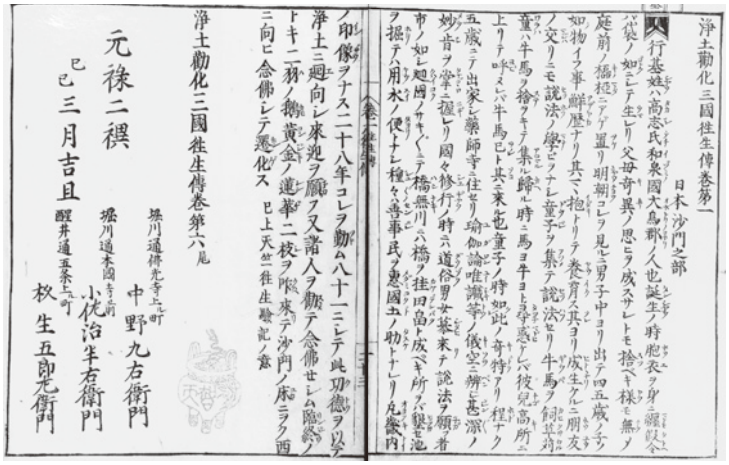


『浄土勧化三国往生伝』

諸往生記類より抜抄した三国（倭国・唐土・天竺）の往生伝。序跋等なく、編者は従来不明であったが、「白慧法師墓誌」により白慧法師すなわち元禄期の俗学者山雲子坂内直頼（享保２（1717）年没72歳）の著述と判明。版下筆跡は数筆あり、確かに巻３・４のそれは山雲子筆跡に似ている。内容的に見ても、山雲子の説法的世界への傾斜と矛盾しない。

［47］『浄土勧化三国往生伝』
（小林－６）

版大６巻合３冊(26.8×19.0)。書題簽「〈三国／因縁〉浄土勧化往生伝」。内題「浄土勧化三国往生伝」。序跋なし。刊記「元禄二禩／己巳三月吉旦／〈堀川通仏光寺上ル町〉中野九右衛門／〈堀川通本国寺前〉小佐治半右衛門／〈醒井通五条上ル町〉杉生五郎左衛門」。早印。四周単辺１３行。漢字カナ交じり。改装茶色表紙、青海波に鳳凰の丸（空押）。印記「宝卓堂」「智天」。識語「南無阿弥陀仏　隆天（花押）」「唐沢用」。＊1689

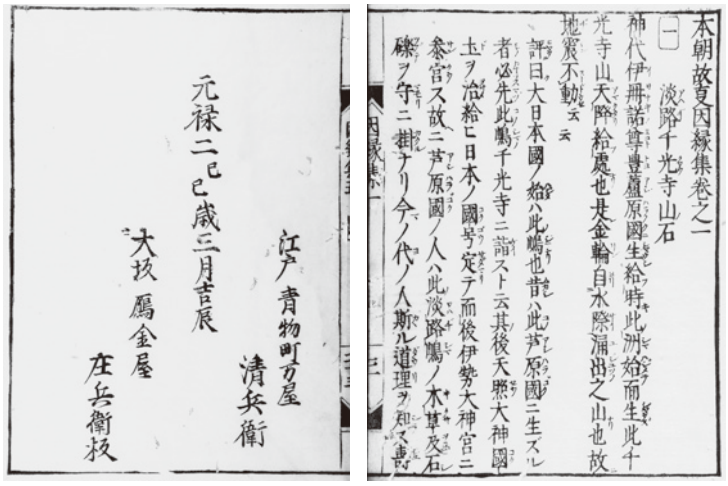

浄土勧化三國往生傳卷第一
日本沙門之部
元禄二禩
己巳三月吉旦
堀川通仏光寺上ル町 中野九右衛門
堀川通本國寺前 小佐治半右衛門
醒井通五条上ル町 杉生五郎左衛門

『本朝故事因縁集』

著者未詳。説法談義に供される諸国奇談や因果話を収める。各話の末に「評曰」と、著者自身の見解や解釈を付している。巻１の１「淡路千光寺山石」、巻１の２「美濃養老滝」などと各地の伝承を豊富に収録しており、柳田国男は民俗資料として本書を利用している。奇談物の仮名草子や浮世草子、勧化物などと共通する話が多く、その影響力が知られる。主版元の大坂雁金屋庄兵衛、江戸版元の万屋清兵衛は『西鶴織留』（元禄７）・『万の文反古』（元禄９）・『好色つは物揃』（元禄９）などの西鶴本と共通する。

［48］『本朝故事因縁集』
（小林－35）

版大５巻５冊（25.5×17.7）。原題簽（左肩双辺）「〈本／朝〉故事因縁集」。目録題・内題「本朝故事因縁集」。序跋なし。最終丁裏に刊記「元禄二己巳歳三月吉辰／〈江戸青物町万屋〉清兵衛／〈大坂鴈金屋〉庄兵衛板」。四周単辺10行。漢字カナ交じり。原装縹色表紙。＊1689

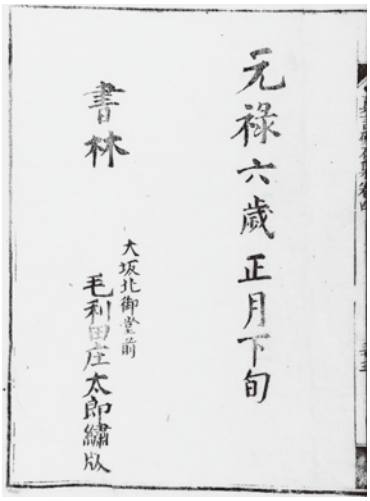

本朝故事因縁集卷之一
淡路千光寺山石
元禄二己巳歳三月吉辰
江戸 青物町万屋 清兵衛
大坂 鴈金屋 庄兵衛板

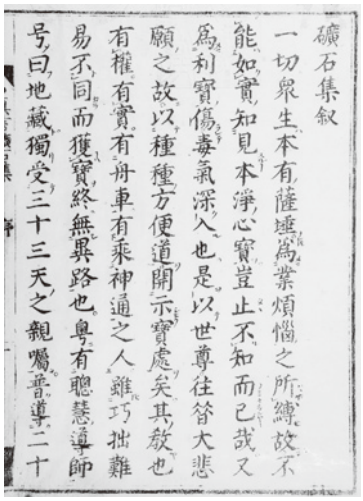
『礦石集』

蓮体（惟宝）著。著者は河内国錦部郡清水村の人で、浄厳門の真言宗学僧。先行の『地蔵菩薩利生記』『地蔵菩薩利益集』に洩れた地蔵菩薩の霊験譚を中心に種々の説話を収め、諸仏諸真言の利益を説く。実在の地名や人名を記した、同時代の奇談巷説を多く含んでおり、当時の説法を聴く人々の興味がどこにあったかをうかがわせている。主版元の毛利田庄太郎は『椀久一世の物語』（貞享２）・『好色五人女』（貞享３）・『日本永代蔵』（貞享５）の西鶴本を出した大坂の古参書肆。

［49］『礦石集』（小林－22）

版大４巻６冊（25.9×18.2）。原題簽（左肩双辺）外題・序題「礦石集」。目録題・内題「真言礦石集」。元禄５年孟春、林下乞士無尽蔵自序。最終丁裏に刊記「元禄六歳正月下旬／書林〈大坂北御堂前〉毛利田庄太郎繍版」。後印。四周単辺12行。漢字カナ交じり。原装縹色表紙。印記「智宝」「山内」。初版は毛利田の前行に「〈大坂立売堀阿波橋町〉小嶋九郎兵衛版行」、次行に「〈京冨小路仏光寺上〉中河喜兵衛梓」とある相合版で、本書は２書肆の名を削除した後印本。＊1693





説話の書物を読む（5）　説話と入試

説話集は多くが短編で、しかも完結した内容をもつことから、入学試験にしばしば出題されます。以下に掲げたのは、2001年度の名古屋大学文学部の入試問題です。別々の説話の類似点をどのように読解するか、さらには「腹あしき」上人厳雄房に対する著者の視線がどのようなものであるのかを、問うています。

問題　次のA・Bの文章は、『沙石集』のある一章の中に収められている話である。これを読んで、後の問に答えなさい。

A　中頃、甲斐国に厳雄房といふ学生ありけり。修行者多く給仕奉事して学問しけり。あまりに腹のあしき上人にて、修行者ども、時非時さばくり荷用するに、湯の熱きも又ぬるきもしかり、遅きをも腹立て、とく持て来れば、「法師に物食はせじとするか」とて、食ひさして打置きてしかりけり。そのあはひを見んとて、障子の隙よりのぞけば、「あれは何を見るぞ」とて、いよいよ腹立しければ、常には心よからずのみありけれども、①よき学生なりければ忍びてこそ学問しけれ。妹の女房、最愛の一子におくれて、人の親の習ひといひながら、あながちに嘆きければ、よその人もとぶらひ哀れみけるに、この上人とぶらはざりける事を、「あらうたてや、これほどの嘆きを上人のとぶらはれぬよ。よその人だにも情をかくるに」と言ひければ、弟子の中に聞きて、「かの女房の恨み申され候なるに、御とぶらひ候へ」と言へば、例の腹立して、「無下の女房かな。法師が妹なんどいはん者は、普通の在家の人に似るべからず。生老病死の国に居りながら、愛別離苦の愁ひなかるべしと思ひけるか。あら不覚や。言ひ甲斐なき女房かな。いでいで行きてつめふせてこむ」とて、かさかさとして行きぬ。「まことにや、わ女房の嘆きをとぶらはぬと恨み給ふなるは」と言へば、「あまりの嘆きに心もあられぬまに、②さる事も申してもや候ひけむ」と言へば、「無下の人かな、さすがこの法師が親しきしるしには、③世の常の人にや似給ふべき。生ある者必ず滅す。会者は定めて離るる。南浮はもとより老少不定の国なり。前後の相違、母子の別れ、世に無き事か。始めて嘆き驚くべきにあらず。返す返す言ひ甲斐なし」としかりければ、「かたの如く、その道理は承はりて侍れども、身を分けて出で来、なつけて候ひつる上、心ざまもかひがひしく候ひつれば、何の道理も忘れて、ただ別れのみ悲しく覚え候」とて、涙もかきあへず嘆きければ、「あら愚癡や、道理を知りながら猶嘆くべきか。さればそれは知りたる甲斐か。不覚や。」とて、いよいよ責めふせけり。さて、かの女房、涙をおしのごひて、「そもそも人の腹立ち候事はあしき事か、又くるしからぬ事か」と言へば、「それは貪瞋癡の三毒とて宗との煩悩の一なり。④疑ひにや及ぶ、おそろしき過なり」と言ふ時、「⑤などさらばそれほどに御心えのあるに御腹はあまりにあしきぞ」と言ふに、はたとつまりて、言ひやりたる事は無くして、「よしさらば、いかにも思ふさまに嘆き給へ」とて、しかりて出でにけり。

B　質多居士といふ俗の初果の聖者ありけり。信心深くして常に僧を供養しけるに、善法比丘といふ僧、常にかの家に行きて供養を受く。ある時、遠国より客僧来たる。居士ねんごろに供養しけり。善法比丘これを見て、我をばかやうに供養せずして、他国の僧を重くする事、本意なくそねましく思ひて、もとより腹あしき比丘にて、悪口しけり。「今日の御供養こそ目出たく見え候へ。山海の珍物数を尽くされたり。只無き物とては油糟ばかりなり」と言ふ。居士油を商ひて世を渡る由を言へり。ここに居士、「只今思ひ合はする事侍り。商ひの為に諸国をありきしに、ある国に鶏の形世の常の鶏にて、鳴く声は烏の声なる鳥ありき。その由を問へば、「この鶏の母は烏にとついでうめるによりて、形は母に似て、声は父に似たり。これを烏鶏と名付く」と言へり。今御形を見奉れば沙門の御形なり。仰せらるる御ことばは在家のことばなり。かの烏鶏こそ思ひ出でられ候へ」と言ふ時、善法比丘ことば無くして、腹立して食せずして座を立ち去る。

【語注】
○学生　仏典を修めて師匠の資格をもつ学僧。
○奉事　目上の者に仕える。　○時非時　寺院の食事。
○さばくる　取り扱う。　○荷用　給仕。　○湯　食後に喫する白湯。
○生老病死　人生で避けることの出来ない四大苦。生老病死の国とは現世。
○愛別離苦　愛する者と離別する苦しみ。
○わ女房　おまえ。「わ」は親愛ないし軽侮の気持ちを込めて相手を呼ぶ接頭語。
○南浮　人間世界。　○なつけて　かわいがって慣れ親しませて。
○貪瞋癡の三毒　貪欲・怒り・無知。　○宗との　主要な。
○質多居士　釈迦の弟子の一人。居士は在家の男子。
○俗の初果の聖者　俗人で、煩悩を脱して悟りの第一段階に至った聖人。
○比丘　出家の男子。　○沙門　出家。

問一　傍線部①～⑤を口語訳しなさい。
問二　Aの話とBの話とはどのような点が似ているか、説明しなさい。
問三　この文章の作者は、厳雄房の人柄や言動に、どのような興味を感じているのだろうか。自分の思うところを記しなさい。
問四　『沙石集』について知るところを記しなさい。

主な参考文献

黒田彰・湯谷祐三編『説話文学研究叢書第八巻　小林忠雄集』クレス出版、2004　※[13][14][15]を収録。
『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983〜85
三木紀人編『別冊国文学　今昔物語集宇治拾遺物語必携』学燈社、1988
松村雄二・林達也・古橋信孝編『日本文芸史第三巻　中世』河出書房新社、1987

Ⅰ　説話と唱導
徳田和夫「勧進聖」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1983・12)
関山和夫「説教師」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1983・12)
小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注『新日本古典文学大系　宝物集・閑居友・比良山古人霊託』岩波書店、1993
山田昭全・大場朗・森晴彦編『宝物集』おうふう、1995
美濃部重克校注『閑居友』三弥井書店、1974
安田孝子・梅野きみ子・野崎典子・河野啓子・森瀬代士枝『撰集抄　校本篇』笠間書院、1979
渡辺信和・安田孝子・梅野きみ子・野崎典子・河野啓子・森瀬代士枝『撰集抄　大林院本・小林本』勉誠社、1982　※[６]を収録。
千野香織「「西行物語絵巻」の復元」(小松茂美編『日本絵巻大成　西行物語絵巻』中央公論社、1979)
池上洵一校注『三国伝記』三弥井書店、1982
簗瀬一雄編『内外因縁集・因縁集』古典文庫、1975　※[14][15]を収録。
阿部泰郎「長谷寺の縁起と霊験記」(『仏教民俗学大系１　仏教民俗学の諸問題』名著出版、1993)
藤巻和宏「長谷寺の縁起」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1998・12)

Ⅱ　世俗説話の世界
後藤昭雄・池上洵一・山根對助校注『新日本古典文学大系　江談抄・中外抄・富家語』岩波書店、1997
益田勝実「古事談」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂、1965・2)
小林保治校注『古事談上・下』現代思潮社　1981
播磨光寿・磯水絵・小林保治・田嶋一夫・三田明弘編『続古事談』おうふう、2002
今野達・小峯和明・池上洵一・森正人校注『新日本古典文学大系 今昔物語集』(岩波書店、1999)
小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集　宇治拾遺物語』小学館、1996
小内一明「「宇治拾遺物語」伝本の系統分類」(『笠間選書120　宇治拾遺物語』笠間書院、1979)
永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系　古今著聞集』岩波書店、1966
西尾光一・小林保治校注『新潮日本古典集成　古今著聞集』新潮社、1983
浅見和彦校注『新編日本古典文学全集 十訓抄』小学館、1997
和泉基博編『十訓抄』古典文庫、1976
村田秋男編『寝覚記』古典文庫、1980

Ⅲ　尾張国長母寺と無住
三木紀人「沙石集・雑談集」(『説話の講座第5巻　説話集の世界Ⅱ』勉誠社、1993)
安田孝子「「沙石集」を近世はいかに受けとめたか」(『椙山女学園大学研究論集』1、1970・3)
渡辺綱也校注『日本古典文学大系　沙石集』岩波書店、1966
小島孝之校注『新編日本古典文学全集　沙石集』小学館、2001
三木紀人・山田昭全校注『雑談集』三弥井書店、1973
三木紀人・山田昭全校注『大乗仏典〈中国・日本編〉第25巻』中央公論社、1989
宮坂宥勝校注『日本古典文学大系　仮名法語集』岩波書店、1964

Ⅳ　説話の継承と発展
黒田彰「新選沙石集（仏教寄妙集）のこと」(『説話文学研究』19、1984・6)
塩村耕「俗学者、山雲子坂内直頼の伝について」(『近世前期文学研究』若草書房、2004)
日野龍夫編『京都大学蔵大惣本稀書集成第8巻』臨川書店、1995
外村展子「『礦石集』について」(『説話』7、1983・8)

実行委員

伊藤　義人（委員長）
秋山　晶則
早瀬　　均
臼井　克巳
伊藤　哲谷
蒲生　英博
逸村　　裕
塩村　　耕
牧村　正史
郡司　　久
藪本　大明
西尾　哲也

企画監修

阿部　泰郎

調査協力

岡山　高博
大原　郁朗

ギャラリートーク「説話集、その豊穣なる世界」

日時：2005年７月２日（土）13:00～15:00
場所：名古屋大学中央図書館５Ｆ多目的室
口演：渡辺　信和（同朋大学）
　　阿部　泰郎（名古屋大学）

名古屋大学附属図書館　2005年企画展

説話（はなし）の書物　―小林文庫を中心に―

会期　2005年６月17日（金）～７月８日（金）
会場　名古屋大学附属図書館４Ｆ展示室
主催　名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
共催　名古屋大学文学研究科、説話文学会

名古屋大学附属図書館 2005年企画展

説話（はなし）の書物

―小林文庫本を中心に―　図録ガイド

発　行　日　平成 17 年 6 月17日
編集・発行　名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒 464-8601　名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-3667　FAX : 052-789-3693
http://www.nul.nagoya-u.ac.jp
印刷・製本　（株）荒川印刷
©名古屋大学附属図書館